

進む電子化と書物の諸相

放送大学名誉教授 柏倉康夫

1. 世界図書館計画

世界中の図書館にある本を電子化して巨大なデータベースをつくり、人類が営々と積み上げてきた知的財産を誰もが利用できるようにする構想が実行にうつされている。

紀元前4世紀に、古代エジプトのアレクサンドリアにあった図書館は、パピルスに記された文献や、プラトンやアリストテレスなどの書物を収集して、その蔵書数は50万冊とも70万冊ともいわれた。その後、図書館は戦火で灰燼に帰したが、いま進行中の計画は、この「アレクサンドリア図書館」を電子情報を用いて再現しようというところみともいえる。

「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」は、「グーグル、全世界の本をスキャンせよ」という特集を組んでこの計画を取り上げた。アメリカのソフトウェア会社「グーグル」は、2004年12月に1つの計画を発表した。それは世界を代表する、アメリカのスタンフォード、ハーヴァード、ミシガン、イギリスのオックスフォードの各大学、それに、ニューヨーク市立を加えた5つの図書館にある1,000万冊の蔵書をすべて電子化し、その内容を検索できるようにするというものであった。これだけの部数の本を1つの図書館に収蔵しようとすれば大変な空間が必要となるが、電子化することでスペース問題を解消しようというのである。

人類が最初につくった本は、シュメール人が粘土板に刻んだ楔形文字のものとされるが、それ以来今日までに各国語で発表された書物はどのくらいあるのか。その数は膨大であるが、現在の技術をもってすれば、これらすべてをハードディスクに収めることは不可能ではない。

スタンフォード大学附属図書館はグーグル社と提携して、蔵書を電子化するためのスキャンを既に始めている。作業を行っているのは、スイスの企業が開発したミニバンほどの大きさのロボットである。人間が本を台の上に置くと、ロボットがゴムでできた指で頁を1枚ずつめくり、それをスキャナーの目で次々に読んで取り込んでいく。「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」の記事によれば、ゴム製の指はじつに繊細な動きをして、貴重本の扱いも安心して任せられるという。

こうしたハイテクによって膨大な書物がすべて電子化され、保存されるのも夢ではない。ただその際に問題となるのは、読者の求める事柄が記述されている書物に、どうやってたどり着き、どうやってその箇所を参照することが出来るようにするかである。

2. 現代のアレクサンドリア図書館

雑誌「本とコンピュータ」の2003年冬号に、オンデマンド移動図書館を実現させたアメリカ人のブルースター・カール（Brewster Kahle）のインタビューが紹介されている。カールはシリコンヴァレーのハイテク企業でキャリアを積んだあと、1996年にNPO「インターネット・アーカイブ」を立ち上げた。

彼は20世紀半ば以降のコマーシャルなどの古い動画を蓄積したアニメーション・アーカイブや、児童書を集めたテキスト・アーカイブ、音声資料を収集したサウンド・アーカイブなどをつくり、それをウェブサイトで公開してきた。これらいずれも、意図して保存し公開しなければ、私たちの目に触れないまま失われていく可能性の高い資料である。

カールは西海岸を本拠に活動していたが、彼の「インターネット・アーカイブ」が世界の注目を集めたのは2001年9月11日の衝撃的な出来事の直後であった。

彼は「9・11事件」をめぐって、世界中の報道機関が報じた映像だけでなく、市民による現場の写真や関連資料などをまとめ、それを分類して、オンライン・アーカイブとして公開した。その結果、事件から間もない時点で50万頁を網羅した資料庫「September Eleventh」の存在は瞬く間に世界中に知れ渡った。

その後、彼はこのテクノロジーを使って、誰もが人類のあらゆる知識にアクセスできることを目指し、著作権の切れた100万冊の本をデジタル化して、それを無料で提供するサービスを開始した。そしてこのデータのコピー一式を、まずは「アレクサンドリア図書館」があったエジプトに提供したのである。

だが彼は贈呈式で、当時のムバラク大統領夫人から率直な感想を聞かされたという。それは、デジタル化されたテキストも貴重だが、好みからいえば、自分は紙に印刷された本が好きで、コンピュータの画面で読めるかどうか自信がない、という告白だった。これを聞いたカールは、書物をデジタル化すると同時に、デジタル・データをもう一度紙に刷ることを考えたのである。こうしてオンデマンド移動図書館の構想が生まれた。

移動図書館は1台のミニバンにカラー・レーザー・プリンターと裁断機、製本機をのせたもので、本が欲しい人はまずカタログから希望の本を選ぶ。カリフォルニアにある事務局のサーバーには、デジタル化された本のデータが蓄積されており、版下の状態でダウンロードできるように準備されている。車の屋根にはパラボラアンテナが載っていて、衛星を通してデータをダウンロードし、プリンターで紙に印刷し、両面印刷された紙を自分で製本して本を手に入れる仕組みである。1冊の本は10分ほどで刷り上り、費用も1冊わずか1ドル程度だという。こうした移動図書館がいまアメリカのほか、インドやエジプト、アフリカで活動し、それぞれの言葉で書かれた本を提供している。

ブルースター・カールの発想には大きな特徴がある。それは人類の資産である書物をデジタル化して保存するだけでなく、それをもう一度紙に印刷して本の形に再現して普及させるという点で、これはデジタル情報をそのまま読み取るための機器が高すぎて、個人では入手できない人が多いという現実のほかに、ムバラク夫人の言葉が示すように、手触り

のあるモノとしての書物を尊重したいという思いが働いている。この循環によって、デジタルと紙の双方がともに機能する新たな「書物」の装置が生み出されることになった。

3. 電子化と草稿

2005 年 3 月、長崎の出版社が遠藤周作の名作『沈黙』の草稿を出版して話題となった。『沈黙』は 1966 年に発表された小説で、キリスト教禁止令が出された 1630 年代の長崎を舞台に、迫害のためにキリスト教を捨てた宣教師フェレイラ神父やその謎を知るために来日した司祭ロドリゴの苦悩を通して、キリスト教の本質を問おうとした作品である。

『沈黙』の遠藤自筆の生原稿は誤って燃やされてしまい、作品を遠藤周作がどのように発想し、執筆・訂正を行ったのか、その跡をたどって創作の秘密に迫ることは出来ないとされてきた。これまで知られていた原稿は、秘書の塩津が清書した 375 枚に遠藤が訂正を書き入れたものだけとされてきた。ところが 2000 年 5 月、長崎に遠藤周作記念館が開館し、その専門研究員となった藤田尚子が、残された資料の中から 22 枚の草稿を見つけだして、清書原稿ではうかがい知ることが出来なかった創作の過程の一部が明らかになったのである（藤田尚子『遠藤周作「沈黙」草稿翻刻』、長崎文献社、2004 年）。

文学研究にとって、作家の生原稿が存在するかどうかは大きな問題である。創作の際の試行錯誤の跡をとどめる原稿が存在すれば、それを手がかりに、どのような過程を経て 1 つの作品が生まれてくるかを解き明かすことができる。こうした研究は「生成論」と呼ばれて文学研究の重要な分野の 1 つである。

パソコンが普及した現在、文章を書くのに鉛筆やペンで手書きする割合はどれほどだろうか。知り合いの編集者によると、いまや執筆者の多くがパソコンで原稿を書き、それを電子データとして出版社のコンピュータに直接送ってくるのが普通だという。この場合には、よほど几帳面な人でない限り、遠藤の生原稿のように幾度も修正した草稿は残らないことになる。作家の中には創作過程での苦しみを覗かれたくない、第一、作品は読者に読んでもらえばいいので、研究者にあれこれ詮索されるために書くのではないと、清書原稿を出版者に渡したあと、草稿は破棄してしまう作家もいる。

「生成論」は作品の解明だけでなく、一人の作家の思想の発展をたどる上でも有力な方法である。事実、フランスでは大長編小説『失われた時を求めて』（*A la recherche du temps perdu*）を書いたマルセル・プルースト、日本でいえば宮澤賢治の詩や散文作品が、長い年月を経ていかに変貌していったかについて綿密な研究が行われていて、彼らの思想と作品理解に役立ってきた。

宮澤賢治のテキスト研究の成果は、『校本 宮澤賢治全集』に示されているが、その第 12 巻（上）（筑摩書房、1975 年）には、人口に膾炙した「雨ニモマケズ」を含む手帳の全頁の写真版が掲げられている。

「雨ニモマケズ」は手帳の 51 頁から 60 頁に書かれ、有名な冒頭は、最初、「雨ニマケズ / 風ニマケズ」となっていたことが分かる。賢治はこれを、「雨ニモマケズ / 風ニモマケズ」と音韻を整えるために訂正した。これは「ニマケズ」の各文字の間隔が同じなのに対

して、「モ」の字だけが小さく右に寄った形で挿入されていることから推測できるのである。宮澤賢治は作品に絶えず修正を施した人で、生前に出版された唯一の詩集『春と修羅』は、彼自身が活字の上に手入れをしたものが3冊現存するが、そのどれも異なる推敲の跡を残していて、どの異文（ヴァリエント）が最終的なものかを確定することができない。

全集の編纂を担った入澤康夫は、賢治の推敲について、「作品の推敲ということは何も賢治独特のことではありません。一篇の決定的な本文に到達するため、下書き、手入れし、清書し、また手入れし、再清書し・・・という作業がなされるのは、その度合にはいろいろ違いがあるにしても、どの作家にも見られることです。しかし、賢治の場合には、それが単に徹底して行われているというだけではない重大な特質があります。彼の推敲は、そのような、最終的・決定的な完成をめざして、長い時間をかけて、作品のあちらを直したり、こちらをととのえたりする、といったものではなく、その都度その都度の完成と、その度毎になされるそこからの脱却を本質としていて、しかもこのことについて、作者自身きわめてはっきりとした方法的自覚を持っていたらしいのです。（『宮澤賢治——プリオシン海岸からの報告』、168-169 頁、筑摩書房、1991 年）と述べている。この方法論こそ賢治が「四次元芸術」と呼んでいたもので、すべては第四の次元である時間軸にそって移動し変化していく。その変化する一つ一つの相すべてが作品の真実であり、変化の相において捉えられた全体がその作品のすべてだという考えである。こうした文学観は「農民芸術概論」などの中に記されている。

こうした推敲の軌跡を典型的に示しているのが、未完に終わった『銀河鉄道の夜』である。入澤は現在残されているこの作品の原稿 83 枚と構想メモのすべてを、『宮澤賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』として複写して刊行した。（宮澤賢治記念館、1997 年）これを見ると、賢治は色の違うペンや鉛筆によって推敲を重ねたことが分かる。原稿には番号が打たれていないものもあり、原稿用紙の裏に書かれたもの、わら半紙に書かれたものなどさまざまで、これらを読み解くと時間の経過とともに地層のようになった重なった作品の姿が浮かび上がってくる。

『銀河鉄道の夜』には初期形第 1 次稿から最終形まで 4 種類の作品があり、第 3 次稿までは、ブルカニロ博士という謎めいた人物が出てくるが最終形には登場しない。この変更にしたがってラストシーンも、初期形第 1 次稿から第 3 次稿までと最終稿とでは異なり、ジョバンニが「博士」と呼びかけるのは、第 3 次稿まではブルカニロ博士なのに、最終稿では川にはまって死んだカムパネルラの父親を指すように変えられている。

こうした変更は宮澤賢治の思想の変遷と密接に関わっており、生涯の時間軸に沿って展開する作品各層の全体が、文学者宮澤賢治という存在を示しているのである。私たちがそれに接近できるのは、賢治の手書き原稿が残されたからに他ならない。

賢治は亡くなる前日の夜、弟の清六に、「おれの原稿はみんなおまえにやるからもしどこかの本屋で出したいといってきたら、どんな小さな本屋でもいいから出版させてくれ。こなければかまわないでくれ」と言った。これを遺言と受けとめた清六は大切に兄の原稿を守ったのである。

4. 「賽の一振り」

19 世紀のフランスの詩人ステファヌ・マラルメは、1896 年、雑誌「コスモポリス」に「賽の一振り」(Un Coup de dés)と題する詩を発表した。これを目にした読者は度肝をぬかれた。フォリオ版見開き 2 頁を一面として、それぞれのモチーフを負った 12 音韻綴詩句 (alexandrin) が、さまざまな大きさの活字を使って重層的に配置されていたのである。頁を開くとまず目に飛び込んでくる黒と白の強烈な視覚的効果が、それまでの文学作品とはまったく異なる、新しい何ものかの出現を予感させた。

マラルメがこの作品で目指したのは、活字の種類、それが頁のなかに占める位置、詩句を囲む周囲の空白の量感の違いによって、言葉のそれぞれに、異なる重要度、音色、律動をあたえ、思想の微妙に変化するニュアンスを、いわば動態の状態で表現することであり、さらにテキスト全体を「建築的な構成」をもった空間に仕上げることであった。

彼はまた、詩が朗読されるときの声の抑揚、強弱を、活字の種類や大小、その位置によって指示した。こうして作品は、いわば文字による音譜になった。ただこの「コスモポリス」の印刷に不満だったマラルメは、相応しい活字を探し、詩句の配置を再考して、決定版をつくらうとしている最中に亡くなってしまったのである。マラルメはこうした形式をもつ書物をはじめ、書物が持つべき形態に想いをこらした。そうした理想の書物が実現したとき、1 冊の書物はまさしく世界を包摂することが出来ると考えたのだった。

コンピュータの登場は、書物の世界にさまざまな影響を与えている。書かれた文字情報は、原稿から一度コンピュータを介して電子データにされ、こうしたデータは従来のように紙に印刷することも、あるいは CD-ROM などの素材に収録して読み出すことも、サーバーに保存しておいて要求に応じて取り出すこともできる。

世界の主要な図書館に所蔵されている書物の内容が電子化され、家庭や教室にしながら、自分のパソコンを使って検索し、本文にアクセスできる日はそれほど遠いことではない。私たちは、たかだか 50 年前にくらべても、知りたい事柄に簡単にアクセスできるようになり、知識は飛躍的に増大した。ただこうして得た知識は、それだけでは身についた知恵とはならない。

アナトール・フランスというフランスの小説家が書いた『文学生活』という文章の中に、こんな話がある。東方の若い王子が即位したとき、王国を正しく治めるための知恵を集めてくるよう、賢者たちに命じた。賢者たちは世界中を旅して 30 年後に 5,000 冊の本を持ち帰る。しかしこれだけの本は読むには多すぎるとして、もっと冊数を減らして持ってくるように命じる。賢者たちは 15 年後に 500 冊、さらに 10 年後には 100 冊に減らしたが、それでも忙しい国王は読もうとしない。結局、賢者たちは、読めば最善の身の処し方が学べる本を 1 冊だけに絞り込んで持ち帰った。だがそのとき国王は瀕死の床にあって、この 1 冊さえ読む時間がなかったという話である。

「世界図書館」を構成する巨大なデータベースは 5,000 万冊の書物に相当し、それを探して持ち帰った賢者は、さしずめパソコンとネットである。だがこれに頼るだけでは、知

識は得られても、人生に必要な真の知恵を収めた1冊の書物を見つけ出すことはできない。見つけ出すには賢者に命じるのではなく、王自身、つまり私たちが自分で探しに出る覚悟が必要だと、この逸話は教えているようである。